

職業能力開発総合大学校の社会貢献 — PTU 図書館における実践から —

職業能力開発総合大学校 図書館 村越 貞之・廣木 菜穂美

1. はじめに

職業能力開発総合大学校図書館（以下「PTU 図書館」という。）では、学生の興味・関心を喚起して学習や研究に向かわせる、あるいは地域住民との交流や地域住民に生涯学習の場を提供することを目的に、2022年度（第1回）から図書館企画展を開催している。

本稿では、PTU 図書館が取り組む企画展（図1）について、社会貢献の観点から考察する。



図1 第2回 PTU 図書館企画展

2. 大学における社会貢献

2.1 社会貢献の意義

昨今、大学の社会貢献活動が盛んである。この背景の1つとして、2005年中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」¹⁾の重要性が指摘できる。同答申では大学に期待される役割の変化に着目して「大学の社会貢献（地域社会・経済社会・国際社会等、広い意味での社会全体の発展への寄与）の重要性」をあげ、「近年では国際協力、公開講座や産学

官連携等を通じた、より直接的な貢献も求められるようになっており、こうした社会貢献の役割を、言わば大学の『第3の使命』としてとらえていくべき時代」と述べている。そして、同答申の考えは2006年12月改正教育基本法に反映され、教育基本法の中で「教育」、「研究」、「社会貢献」の3つを大学の使命と位置付けている²⁾。

また、大学においては「自ら考え行動する力」を育成する、いわゆる「アクティブ・ラーニング」の取り組みが注目されている。実際に、教育現場では「ボランティア教育」や「サービス・ラーニング」などの経験学習が積極的に取り入れられている。

これらの経験学習を通じてコミュニケーション力、他者理解力、リーダーシップなどのヒューマンスキルの育成が図られていることも社会貢献が注目される理由の1つではないかと、筆者らは考えている。

2.2 社会貢献の態様

木村³⁾は、大学の社会貢献を表1のとおり12の項目に分類している。このように大学の社会貢献は、多種多様である。

表1 大学の社会貢献（12項目）

大学の社会貢献（12項目）
①公開講座、②大学の施設開放、③受託研究
④国や地方公共団体の審議会委員
⑤学生のボランティア活動（ボランティアセンター）
⑥学部学科を活かした取り組み
⑦公的機関との協定（教育委員会、警察など）
⑧寄付講座、⑨産官学連携、⑩地域連携センター
⑪大学教育改革プログラム選定取り組み
⑫生涯学習センター

2.3 職業大における社会貢献

職業能力開発総合大学校（以下「職業大」という。）における社会貢献について、2015年度以降の学生の教育に関連する主な事項を整理すると、表2のとおり6項目になる。

表2 職業大における社会貢献（6項目）

職業大における社会貢献（6項目）
①ウィンターイルミネーション（図-2）
②なかまちテラスイルミネーション
③おもしろ工学館（ものづくり教室）
④「自主企画実践」の開講 （ボランティア教育）
⑤こだいらブルーベリーリーグ （小平市と市内7大学の連携協議会）
⑥小平市中央公民館主催の生涯学習支援事業講師派遣

上記①～⑥にあるように、職業大ならではの多様な社会貢献を展開している。PTU 図書館でも遅ればせながら、2022年度から図書館企画展の取り組みを開始した。



図2 ウィンターイルミネーション2023

3. 第2回 PTU 図書館企画展の概要

3.1 図書館企画展について

図書館企画展とは、テーマに関する資料を自館や連携する機関等から収集・整理して展示物にまとめ、図書館の一角に一定期間展示する方法で学習機会を提供するものである。大学図書館における学習支援機能は高度情報社会の進展と相まって、高等教育

における質保証や、アクティブ・ラーニング促進の動きの中で注目されている⁴⁾。各大学図書館は学生の興味・関心を喚起するため、あるいは地域住民の生涯学習の場として趣向を凝らしたテーマ企画展を開催している。1例をあげると、島根大学附属図書館では2014年度から毎年「戦争と平和を考える」というテーマで企画展を開催している⁵⁾。また、筑波大学附属図書館では1995年度以降毎年特別展、企画展を開催している⁶⁾。

さらに、米澤⁷⁾は企画展の意義を、下記の5点に整理している。

- (1)学生の興味・関心を喚起し、知識欲をかきたてる。
- (2)展示から啓発された学生を学習に向かわせる。
- (3)図書館の役割を理解させ、資料の利用を促進する。
- (4)地域住民の生涯学習の機会にもなる。
- (5)図書館内の活性化、館員の企画力育成の場になる。

島根大学附属図書館の2017年度企画展の来場者の内訳は「学生・教職員と一般市民が半々程度」と報告されている。また、筑波大学附属図書館の企画展の「来場者の半数程度は学外者」との記述からも、大学図書館の企画展は、地域住民の生涯学習意欲の高まりや、高齢者の居場所確保の問題などが反映されて、「生涯学習の場」としての役割が一層高まっているのではないかと考えられる。

篠塚⁸⁾は、国立大学の法人化以降「大学の社会貢献（地域社会、国際社会への貢献）」が求められるようになっているが、図書館もこれに呼応する形で社会連携、貢献事業として展示会などを位置付け、積極的に推進しようとする動きが明確に表れているとしている。

3.2 PTU 図書館企画展の目的とコンセプト

PTU 図書館企画展の目的とコンセプトを整理すると、図3のとおりになる。

これには、第1に、職業訓練指導員や生産現場の指導者には科学・技術・技能の方向性に対する正しい認識と、地域貢献意識の醸成が欠かせないという問題意識を反映している。未知の地域の科学史を学ぶ機会を提供することを通して、これらの認識・意識の醸成につなげる教育的意図がある。

第2に、地域住民の生涯学習の場（機会）を提供し、社会貢献の役割を果たす意図もある。

なお、2022年度（第1回）PTU図書館企画展では、小平市中央図書館の協力を得て「玉川上水」を取り上げた。

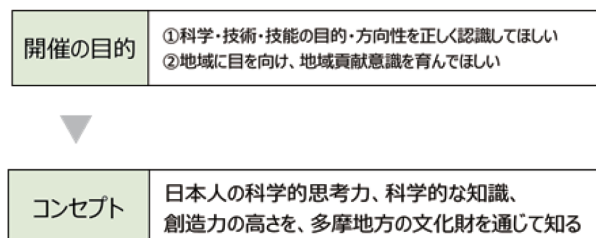


図3 PTU 図書館企画展の目的とコンセプト

3.3 第2回企画展のきっかけ

第2回企画展で「電気自動車『たま』号」を取り上げたきっかけは、展示内容を構想中の2023年2月に、九州産業大学図書館からの『自動車技術會報』第2巻（1948）の文献複写依頼であった。

依頼者は何を調べようとしているのか興味を持った筆者らが資料を読むと、「日本の高性能電気自動車の開発は1940年代に始まり、日本政府（商工省、現在の経済産業省）は電気自動車を普及させ物流網の再生を構想していた」、「日本の自動車保有台数10万台時代の1949年当時、5年間で電気自動車を35,400台製造する計画が策定されていた」など数々の驚くべき事実が確認できた。筆者らの驚きとドキドキ感を多くの方々に伝えたいと思ったことが始まりであった。

3.4 第2回企画展の構成

第2回企画展は、3部構成として次のとおり3回にわけて開催した。

- (1)第1部（7/23～9/15）のテーマは「1940年代、日本の電気自動車開発、それは『たま』から始まった」とし、高い技術力と技能を有する日本の技術者が戦後の混乱期に高性能電気自動車を開発していた事実を紹介した。
- (2)第2部（11/11～12/15）のテーマは「忽然と姿を消す電気自動車、一体何があったのか？」とし、高性能電気自動車が10年ほどの期間で街頭から消えてしまった理由を探った。

- (3)第3部（2/19～3/24）のテーマは「環境問題やSDGsで、再び脚光を浴びる電気自動車」とし、第1部・第2部の振り返りと、まとめの意味を込めて技術の継承、技能の伝承の重要性を伝えることとした。

3.5 具体的な展示内容

第1部、第2部の主な展示物を以下に示す。

(1)現物資料（基本資料）

- ①宮田應義：「我国の電気自動車とその将来性」、『自動車技術會報』、第2巻、第4号、pp.44-45、(1949).
〈概要〉

1949年度～1953年度の5年間で、合計35,400台の電気自動車を生産する国の計画が紹介されている。また、今後の展望では、「5ヶ年計画が達成された暁には、ことに一般乗用車は電気車以外見かけられないようになることと思う」との記述がある。当時の電気自動車への大きな期待がうかがえる。

- ②通商産業省通商機械局車両部自動車課：「自動車生産計画について〔昭和26年度〕」、『自動車技術』、第5巻、第2号、pp.58-59、(1951).

〈概要〉

「新規需要層の開拓は困難である」が、「需要者（タクシー業者等）における代替用、増車用として現在の供給量程度は維持できよう」との記述がある。1951年度の国内計画は1,000台の生産計画で、市場規模は一気に縮小していることが見て取れる。

(2)複写資料（関連資料）

- ①石川和男：「忘れ去られた電気自動車の時代—わが国における第二次世界大戦前後の電気自動車環境—」、『専修商学論集』、第111号、pp.1-22、(2020).

〈概要〉

日本中を席卷する勢いだった電気自動車が一気に衰退する社会・経済情勢など、戦後の電気自動車事情を知ることができる。市場環境が変化する中での企業戦略（技術の継承や技能の伝承、変化にフレキシブルに対応するための組織の柔軟性）について示唆を与えてくれる。

- ②田中次郎：「キ74から『たま』電気自動車、歴代プリンス車の開発」、『自動車技術を築いたリーデ

『たま』号の設計責任者田中次郎氏へのインタビュー記事。『たま』号の最高速度、一充電走行距離など性能の高さだけでなく、当時の販売価格は1台あたり24～25万円（当時の都市勤労者世帯平均年収の約2倍）ぐらい、電気自動車の人気の高さについて大阪と東京と名古屋の3都市では、タクシーは一時期ほとんどの車が電気自動車だったとの発言が確認できる。

〈概要〉

『たま』号の設計責任者田中次郎氏へのインタビュー記事。『たま』号の最高速度、一充電走行距離など性能の高さだけでなく、当時の販売価格は1台あたり24～25万円（当時の都市勤労者世帯平均年収の約2倍）ぐらい、電気自動車の人気の高さについて大阪と東京と名古屋の3都市では、タクシーは一時期ほとんどの車が電気自動車だったとの発言が確認できる。

(3)展示パネル

①企画展の概要

企画展開催の経緯、展示内容を伝える。

②電気自動車『たま』号開発企業関係図（図4）

どのような会社が、どのような理由から電気自動車を作ったのか。そして、その会社はどうなったのかを伝える。

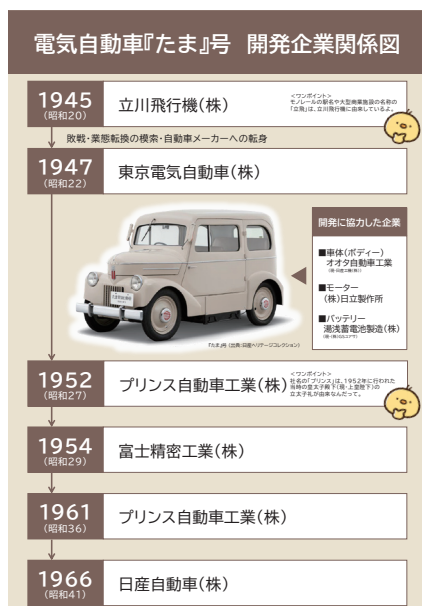


図4 電気自動車『たま』号開発企業関係図
出典：第2回 PTU 図書館企画展展示パネル

③『たま』号ってどんな車？（図5）

『たま』号の外観、車内を写真で紹介。1947年～1951年の5年間で生産された『たま』号の台数や、1949年の『たま』号の市場占有率（推計）をグラフ化した。

④他の車と比べてどうだったの？（図6）

『たま』号の大きさ、重さなどの諸元と、最高速度などの能力をわかりやすく展示するため、現在生産・販売中の日産『サクラ』との比較表を作成した。また、1949年当時の日本の電気自動車製造会社を一覧表にした。

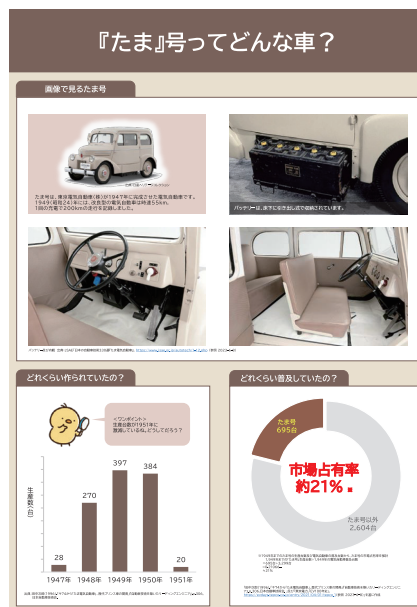


図5 『たま』号ってどんな車？
出典：第2回 PTU 図書館企画展展示パネル

他の車と比べてどうだったの？

車種	全長	全幅	全高	車重	スタイル	ドア数	乗員	モーター	バッテリー
たま号	3,200mm	1,270mm	1,650mm	1,050kg	セダン	2ドア	4名	36V,120A (4.32kW)	40V,162A (6.48kWh)
サクラ (2022年現在、日産自動車株式会社)	3,395mm	1,475mm	1,655mm	1,070kg	軽自動車	4ドア	4名	20kW	20kWh

電気自動車性能試験結果表（1948（昭和23）年3月 第1回目を実施）				
車種の種別	平均速度	1充電走行距離	最高速度	備考
たま号乗用車 (1947年現在)	28.3km/h	96.3km	35.2km/h	小型車・4人乗り
他社乗用車	20～23km/h	50～60km	-	-
たま号トラック	26.1km/h	92.8km	31.6km/h	500kg積載車
他社トラック	18～20km/h	50km	27km/h	-
(参考)たま号改良型 (1949年現在)	-	200km	55km/h	中型車・5人乗り
(参考)サクラ (2022年現在、日産自動車株式会社)	-	180km	130km/h	軽自動車・4人乗り

1949年に日本にあった、電気自動車会社と主力自動車

会社名	主力自動車	
	乗用車	トラック/バス
日本電気自動車製造	デンカ号(中型)	デンカ号(中型トラック)
株式会社中部製作所	-	ナカジマ号(トラック/バス)
神戸製鋼所	トバ号(小型)、神鋼号(中型)	-
三菱電機	-	51人乗りバス
石産精工株式会社	晴号(小型)	-
帝國電気製作所	エシカ号(小型)	小型トラック
東京電気自動車株式会社	たま号(小型/中型)	たま号(トラック)
ユニバーサル電気自動車	小型乗用車	UM-18(バス)

図6 他の車と比べてどうだったの？
出典：第2回 PTU 図書館企画展展示パネル（改変）

⑤クイズに挑戦してみよう！（図7）

企画展の見学を「楽しい学び」の機会にするため、展示資料からクイズを出題した。

クイズに挑戦してみよう！

Q1 とうきょうでんきどうしや さいしや だんきどうしや さいしや だんきどうしや
東京電気自動車が発明した電気自動車の名前は？

① ぼち ② たま ③ はち ④ しろ

Q2 とうきょうでんきどうしや さいしや だんきどうしや さいしや だんきどうしや
東京電気自動車が最初に製造した電気自動車の最高速度は 35km/h でした。
一回の充電で走れた距離は 何km だったでしょう？

① 35km ② 42km ③ 65km ④ 90km

Q3 とうきょうでんきどうしや さいしや だんきどうしや さいしや だんきどうしや
東京電気自動車の電気自動車開発者（技術者）たちは、
電気自動車を開発する前は何かを作っていたのでしょうか？

① 飛行機 ② 戦車 ③ 船 ④ ロケット

Q4 とうきょうでんきどうしや さいしや だんきどうしや さいしや だんきどうしや
東京電気自動車が製造した電気自動車には、
あるアイデアが採用されていました。それは何でしょう？

① 家庭電源コンセントが使える ② 電池の交換が容易にできる
③ 太陽光で発電できる ④ 水陸両用で走れる

Q5 せんご だんきどうしや さいしや だんきどうしや さいしや だんきどうしや
戦後、電気自動車がなぜ開発されたのでしょうか？

① 排ガスによる公害対策のため
② 万国博覧会に出展するため
③ ガソリンが不足して入手困難になったため
④ GHQ（連合国軍総司令部）が開発を指示したため

図7 クイズに挑戦してみよう！
出典：第2回 PTU 図書館企画展展示パネル

4. 企画展第1部・第2部の結果と成果

4.1 開催結果

(1)見学者数の状況

第2回企画展第1部は、2023年7月23日（日）～9月15日（金）の42日間、第2部は同年11月11日（土）～12月15日（金）の25日間、それぞれ開催し、開催日数は延べ67日間、見学者数は累計479人であった。開催期間、開催方法も異なり単純に比較することはできないが、昨年度第1回企画展の見学者数は累計153人で、第2回は第1回に比較すると326人の増加となった。

(2)アンケート調査の結果

来場者479人のうちアンケート回答者は163人で、アンケート回収率は34%であった。回答者のうち、110人（67%）は30代以上であった。また、回答者のうち、総合課程学生は26人（16%）であった。さ

らに、回答者163人のうち、158人（97%）が「とても面白かった」・「面白かった」と回答している。

4.2 第1部・第2部の成果

今回のPTU図書館の実践から特徴的な成果として、次の2点をあげることができる。

(1)プレゼンスの発揮

東京新聞（76年前開発電気自動車「たま」に学ぶ、2023.7.28、朝刊、p.18.）、朝日新聞（戦後EV開発先頭に「たま」がいた、2023.8.16、朝刊、p.17.）の記事掲載と相まって、想定範囲を超える地域から多数の見学者が来館された。また、見学者からの評判を聞いて足を運ばれるという事例も複数聞かれた。さらに、小平市中央図書館からの依頼を受けて、『たま』号をテーマとした生涯学習支援講座（2023.10.21）を開講した。これらの事実から、PTU図書館の地域における存在感はこれまで以上に向上したと評価できよう。

(2)図書館機能の向上

図書館員と見学者の活発なコミュニケーション（情報交換）の結果、『たま』号が製造されていた場所の特定と、そして、その場所が今どうなっているのかに関する資料を収集することができた。

これによって、PTU図書館では、①見学者の質問に対する回答に必要な資料が収集できたことから、レファレンスサービスという役割と、②見学者が収集・整理した資料の寄贈により、新たな地域資料の収集・保存という役割の2つの図書館機能の充実を図ることができた。

(3)企画展第1部の反響とその効果（図8）

2023年8月、東京新聞の記事を読まれて来館された東京都府中市在住のご夫婦からの質問が、2023年9月、朝日新聞の記事を読まれて来館された東京都世田谷区在住の男性が調査・収集された資料によって解決できた事例である。

図書館には従来からレファレンスサービスという役割がある。利用者からの質問に、館員が資料を添えて回答するサービスのことである。同サービスでは、利用者と館員のコミュニケーション（情報交換）が鍵になると言われる。また、他方で「オープンサ

イエンス」の関心が高まる現代にあっては、双方向の情報交換がいろいろな場面で模索されてもいる。

今回の事例は、図書館員と見学者の積極的な双方向のコミュニケーションの結果がもたらした好事例である。



図8 企画展第1部の反響と効果
出展：第2回PTU図書館企画展展示パネル

5. まとめ

第2回企画展第1部・第2部見学者の総数は479人に上り、アンケートからは回答者の97%の興味・関心を喚起することができたという結果であった。また、見学者のうち学外者人数をアンケート調査回答者数から推計すると374人(全体の72.4%)となる。400人近い地域住民の生涯学習の場を提供できたことになる。

今回の企画展では新聞の記事掲載が大きな要因となり、想定範囲を超える地域から多数の見学者が来館された。さらに、第2部終盤の2023年12月12日付け朝日新聞朝刊(「たま」がつないだ緑車雑誌寄贈、p.20.)に、この企画展が緑で、日産自動車との完全合併で姿を消した日産プリンス自動車販売が販

売促進の目的で発行していた雑誌『PRINCE』179冊が寄贈されるという記事が掲載された。企画展に関する3度の新聞記事の掲載は、職業大とPTU図書館の存在感の向上に大いに寄与したものと自負している。

第2回図書館企画展の成果を簡潔にまとめると、「企画展という学びの場で図書館員と市民のコミュニケーションの活性化」が図られ、「電気自動車『たま』号」や、プリンス自動車工業に関する貴重な資料の数々が、収集・保存できたことである。

そして、企画展で作られたつながりは館員と見学者個人の関係から、PTU図書館という学びの場を通じた人的ネットワーク構築の兆しが見える。このつながりを大切にしながらPTU図書館企画展の継続・充実を図り、図書館併設の多目的学習室をサロン(サイエンスカフェ)化して講演会、勉強会を開催するなど、学生・教職員と地域住民の方々との交流(生涯学習)の拠点になるよう取り組みたいと考えている。少子化の影響などから、職業大を含めて一層大学を取り巻く環境は厳しさを増していくと考えられている。オープンサイエンスの動向を鑑みると、多目的学習室のサロン(サイエンスカフェ)化は職業大の存在感向上にも資するものと考えられる。

〈参考文献〉

- 1) 文部科学省：中央教育審議会、「我が国の高等教育の将来像(答申)」. pp.4-5, pp.13-15, (2005).
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm (2024.2.28参照)
- 2) 大学基準協会：「大学の3つの使命—教育、研究、もう一つは?」. 『大学基準協会公式note』.
<http://note.juaa.or.jp/n/n228fc16dae> (2024.2.29参照)
- 3) 木村佐枝子：『大学と社会貢献—学生ボランティア活動の教育的意義』, 創元社. pp.21-23, (2014).
- 4) 岩崎千晶 [ほか]：「日本の4年制大学におけるラーニングコモンズの学習支援に関する実態調査」, 『日本教育工学会研究報告集』. 第19巻, 第1号, pp.435-438, (2019).
- 5) 小林奈緒子：「2017年度島根大学附属図書館企画展示「戦争と平和を考える2017—記録された戦争体験—」実施報告」, 『島根大学附属図書館報』. 第20号, pp.51-58, (2018).
- 6) 篠塚富士男：「大学図書館における展示会活動—図書館展示の分析及び筑波大学附属図書館の事例報告—」, 『大学図書館研究』. 第80巻, pp.46-48, (2007).
- 7) 米澤誠：「広報としての図書館展示の意義と効果的な実践方法」, 『情報の科学と技術』. 第55巻, 第7号, pp.305-309, (2005).
- 8) 前掲6) : pp.44-45.